ある団地社会の実態の一側面

—— 宝塚市の公団住宅団地の調査より ——

大道安次郎

I

I—i　宝塚市は最近とくに住宅的機能を増してきている。そのために宅地造成や住宅建設が極めて盛んである。有力な民間デベロッパーたちによる住宅建設も続々行なわれているが，その間にあって日本住宅公団による仁川住宅団地と逆瀬川住宅団地はとくにきわ立っている。こうした住宅公団の開発は，イ．入居者の形成する団地社会にとっても，ロ．また受入れ例の地元地域社会や市当局にとっても，さまざまな諸問題を投げかけている。だからこれらの諸問題は少なくともイ，ロの二つのアプローチが必要であろう。だがこれらのことを一挙に行なうことは不可能なので，今回はその第一歩として日本住宅公団の住宅団地のみに焦点を合わせ，しかもイのアプローチのみに限定していることを了承して頂きたい。

I—ii　ここで仁川団地と逆瀬川団地の開発などについて若干触れておきたい。

まず建設時期と規模であるが，仁川団地は逆瀬川団地よりも古く，規模も大きい。仁川団地は昭和34年9月から入居が始まり，36年4月に終っている。その規模は全部で898戸で，1DK150戸，2DK566戸，3DK182戸であり，家賃は6,100～11,300円となっている。逆瀬川団地は昭和41年2月から入居が始まり，45年に終っている。その規模は520戸で，2DK 220戸，3DK 300戸，家賃は9,000～13,000円である。

仁川団地の所在地は，阪急今津線仁川駅からそう遠くない。逆瀬川団地は，阪急今津線逆瀬川駅を逆瀬川を上にあがった右側，宝塚ゴルフ場の近くにある。（両団地の地図上の位置はここでは省略する。）

I—iii　調査対象は悉皆調査で，主婦に限定した。また方法は質問紙（調査票）に記入するという方法をとった。いわゆるアンケート方式をとった。インターヴュー方式の併用，さらに数回の調査の積重ねる必要を痛感している。また調査票の項目作成についてもプライバシー尊重のほかに，団地住民の気持を配慮に入れて，極めて簡単なものにした。こうしたことから実態の表面的な，しかもその一面しかとらえることができなかった恐れが多分にある。

調査期日は昭和45年9月上旬から中旬であって回収率はつぎの第1表の通りである。

第1表

	軒　数	回収数	有　効	拒　否	回収率
逆	517	368	252	112	72(%)
仁	794	498	366	155	65(%)

回収率は逆瀬川団地で72%，仁川団地で65%であるから，住宅団地の性格から見てまあまあといえるが，有効票数は逆瀬川団地では252，仁川団地では366とかなり低い。だから有効回収率は逆瀬川団地では50%弱，仁川団地ではさらに低く46%である。公的背景のない私的な資格で行なう調査に対する壁の厚さをつくづくと痛感させられた次第である。

I—iv　こうした調査には何よりもまず調査対象の概括を知っておく必要がある。これまでのこうした調査で，すでに同質的な特定の人びと（ホワイト・カラー）が集団的に住んでいることが明らかにされているが，宝塚市の二つの住宅公団でも果してそうであるかを一応確めておく必要がある。

私たちはそのことを確めるために，調査票のうちにつぎのような項目を設定した（第2表）。

ところが記入者を主婦対象にしていたので，主婦だけの記入事項，しかも不完全な形でしか得られなかった。主婦のみの年令と最終学歴と勤務先と子供の学校名とが記入されただけであった。第

第2表　家族構成員の社会的性格

世帯主と世帯主との続柄	性別	年令	最終学歴	身出地	職業	勤務先	勤務先所在地	お子様の学校名

第3表　家族構成員の社会的性格

	平均年令	学歴	小	中	高	短大	大	旧制女	その他	DK	計
逆瀬川	33.5才		4(1.6)	9(3.6)	129 (51.2)	23(9.1)	27(10.7)	25(9.9)	7(2.8)	28(11.1)	252(100)
仁川	35.5		3(0.8)	16(4.4)	174 (47.3)	34(9.3)	31(8.5)	66(18.0)	7(1.9)	35(9.8)	366(100)

勤務先	大阪	神戸	西宮	尼崎	大阪府下	兵庫県下	その他	DK	計
逆瀬川	110(43.6)	28(11.9)	12(4.8)	15(5.9)	13(5.1)	13(5.2)	1(0.4)	60(23.8)	252(100)
仁川	127(34.7)	58(15.8)	24(6.6)	15(4.1)	13(3.5)	9(2.5)	5(1.4)	115(31.4)	366(100)

学校名	大学	高校	宝塚第一中	西山小	西山幼稚園	信愛幼稚園	武庫山幼稚園	その他の幼稚園	保育所	DK	計
逆瀬川	10	8	6	68	18	2	2	4	1		
	大学	高校	宝塚第一中	仁川小	仁川幼稚園	信愛幼稚園	その他の幼稚園	仁川保育所	DK	計	
仁川	7	17	26	134	15	13	6	4			

海星小3　　その他の中学校4

3表がそれである。

イ. これによってみると，主婦の平均年令は逆瀬川公団では33.5才，仁川公団では35.5才となっている。しかし家族には主婦のほかに夫や子供もいる。これらのことはさきに触れた理由で記入もれであった。幸いに別な機会に行なった調査（これは「買物調査」を昭和43年9月に市と商工会とで行ない，私がその報告書をまとめた。以下「買物調査」と略す）でこの不足を補うことができる。ただこの買物調査は校区単位に行なったところから，逆瀬川団地の子供が通う西山小学校地区，仁川団地の子供が通う仁川小学校地区が直接参考になるが，これらの小学校に通う児童は公団の子供だけではない。これらの校区に属する公団以外の家庭の子供も通学している。だから一応の参考になるだけであろう。それによって見ると，西山校区（逆瀬川団地）では 30才代が男 33.3%，女81.0%，40才代が男66.7%，女15.9%となっている。仁川校区（仁川団地）では30才代が男38.5%女75.8%，40才代が男54.3%，女19.6%となっている。これら二つの調査を勘案すると，夫と妻，それに家族の人たちの年令が大体想像できる。妻は30才代，夫は40才代が圧倒的に多いことがうかがわれる。

なおつぎのことも考慮に入れる必要がある。それは仁川団地は開設されてから10年以上を経ており，逆瀬川団地はかなり新しく，5年しか経ていないということである。その間の経過が，主婦の平均年令が逆瀬川団地では33.5才，仁川団地では35.5才となっているといえよう。もちろん団地では定着性よりも移動性が多いことも無視できない。これらのことがらを考慮に入れるにしても，宝塚市における二つの公団住宅の家族の年令は，他市におけるそれとほぼ同じであるといえる。

ロ. 家族構成員数については，ほとんどが解答をえられなかったので，「買物調査」からうかがうことにする。それによると，逆瀬川団地（西山校区）では4人が59.8%を占め群を抜いており，5人が18.6%と急減しており，6人が8.2%，3人が 6.2%と続いている。また仁川団地（仁川校区）でも4人が50.0%と多く，5人が25.0%，3人が9.4%，5人が8.1%となっている。だから両団地では4人世帯が過半数を占めており，いわゆる核家族の社会といえる。5人家族が仁川団地では逆瀬川団地より多いことは，団地成立期の年輪の差のひとつの現われともうけとれる。

ハ. 学歴については，主婦のみのものについて見ると，逆瀬川団地では高校卒が51.2%，大卒が10.7%，旧制女卒が9.9%，短大卒が9.1%，仁川団地では高卒が47.3%，旧制女卒が18.0%，短大卒が9.3%，大卒が8.5%となっている。教育程度がかなり高いことがうかがわれる。妻と対応して夫のそれは同等かあるいはそれ以上であることが普通であるから，夫婦の教育程度がかなり高いといえる。

ニ. 職業については世帯主のそれをうかがうつもりであったのが，主婦を記入対象としたためにうかがうことができなかった。そこで主婦のみの職業の集計を示したのが，つぎの第4表である。

第4表　主婦の職業

就職者	無　職	就職者	不　明	計
逆瀬川	227(90.1)	11(4.4)	14(5.5)	252
仁　川	314(85.8)	23(6.3)	29(7.9)	366

第5表

就職者の内分け	会社員	公務員	教師	看護婦	調理師	包装工
逆瀬川	4	2	3	1	1	0
仁　川	7	5	6	4	0	1

団地では共稼ぎが多いようにいわれているが，宝塚の団地の場合は極めて少ない。4.4～6.3%しかない。その内分けも第5表で見られる通りである。主婦の職業ではなく，世帯主の職業を問うことが本来の狙いであったのが，得られなかったので別な調査（「買物調査」）から間接的にうかがうことにしたい。それによると，西山校区（逆瀬川団地）で給与所得者89.7%，商工業自営者3.1%仁川校区（仁川団地）では給与所得者79.4%，商工業自営者 8.1%となっている。給与所得者が圧倒的に多いことがうかがわれる。

ホ. 勤務先についてみると，逆瀬川団地では大阪市・大阪府下が48.7%，神戸11.9%，尼崎5.9%，西宮 4.8%となっている。仁川団地では大阪市・大阪府下が38.2%，神戸15.8%，西宮6.6%尼崎 4.1%となっている。市内での勤務先は極めて少なく，大阪への通勤がとくに多く，神戸がこれに続いていることに注目しよう。

ヘ. 子供の通学する学校については，地元の西山小学校，仁川小学校，また宝塚第一中学が殆んどであることは当然である。例外的に他市の私立小・中学校に通うものがごく少数いる。また幼稚園，保育所なども近くの施設に通っている。大学では逆瀬川団地が8，仁川団地が7，高校は逆瀬川団地8，高校17となっている。

ト. 収入についてはプライバシーに係るので調査項目から外したが，幸いに「買物調査」で1カ月の家計費を調べたので，それを参考のため示しておこう。2年前のものであるから物価上昇などを考慮に入れておくこと，また校区単位の調査であるところから，必ずしも両住宅公団のそれとマッチしないかもしれないことを念頭に入れておく必要があろう。

1カ月の家計費は，西山校区（逆瀬川団地）では7～8万円が17.5%と第一位を占め，5～6万円16.5%，8～9万円15.5%，6～7万円12.4%と続いている。また9～10万円，10万以上がそれぞれ10.3%を占めている。仁川校区（仁川団地）では4～5万円が18.8%，6～7万円が18.1%，5～6万円が15.6%，7～8万円が12.5%となっており，9～10万が6.9%，10万以上が7.5%である。これを市全体の平均と比較して見るとかなり高額に斜傾しており，とくに9～10万円，10万円以上が多いことがうかがわれる。しかしこれは数年前の資料であることを念頭に入れておく必要がある。また家族構成員は団地においては平均してみると，かなり少ないことも考慮に入れておく必要があろう。

チ. 出身地（主婦）は第6表の通りである。

第6表　主婦の出身地

出身地	兵庫県	大阪府	近畿(兵庫大阪除)	四国・九州	中国	中部・北陸	関東	東北・北海道	沖縄	不明	計
逆瀬川	80(31.7)	53(21.0)	13(5.2)	34(13.5)	15(6.0)	17(6.7)	18(7.1)	9(3.6)	0	13(5.2)	252
仁　川	112(30.6)	62(16.9)	34(9.3)	46(12.6)	47(12.8)	16(4.4)	19(5.2)	4(1.1)	1(0.3)	25(6.8)	366

兵庫県が第1位，大阪府が第2位であることはうなづけるが，四国・九州が案外多い。もちろんこれは四国・九州全地域を含んでいるからであろう。世帯主のそれは不詳。

以上が宝塚市の二つの住宅公団に入居している人びとの社会的性格のごく大体の姿である。

I—iv　住宅団地の経験や入居時期，また何処から来住したか，その理由などについて問うてみた。

第2項でつぎのような問い方をした。

2.　この団地に (イ)何年頃 (ロ)何処から (ハ)どの様な理由でお入りになりましたか

(イ)昭和　　年頃　(ロ)

(ハ)

その結果はつぎの第7表通りである。

第7表　入居時期，来住場所，理由

(2) イ	S34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	DK	計
逆瀬川								135 (53.5)	25 (9.9)	20 (7.9)	19 (7.5)	25 (9.9)	4 (1.6)	252 (100.0)
仁　川	80 (21.9)	24 (6.6)	29 (7.9)	11 (3.0)	15 (4.1)	13 (3.5)	21 (5.7)	26 (7.1)	30 (8.2)	35 (9.6)	45 (12.3)	32 (8.7)	5 (1.4)	366 (100.0)

(2)ロ	大阪	神戸	西宮	宝塚	豊中	尼崎	池田	吹田	伊丹	芦屋	近畿圏内	近畿圏外	大阪府下	兵庫県下	DK	計
逆瀬川	42 (16.7)	32 (12.7)	25 (9.9)	5 (2.0)	12 (4.8)	18 (7.1)	2 (0.8)	6 (2.4)	2 (0.8)	1 (0.4)	5 (2.0)	28 (11.1)	23 (9.1)	20 (7.9)	31 (12.3)	252 (100)
仁　川	41 (11.2)	61 (16.7)	48 (13.1)	17 (4.7)	7 (1.9)	28 (7.7)	5 (1.3)	2 (0.5)	6 (1.6)	9 (2.5)	18 (4.9)	48 (13.1)	20 (5.5)	6 (1.6)	50 (13.7)	366 (100)

入居時期では公団住宅の建設の時期に大体対応している。仁川団地では昭和34年から，逆瀬川団地では昭和41年から入居がはじまっている。何処から来住したかについてみると，逆瀬川団地では大阪16.7%，神戸12.7%，西宮9.9%，その他隣接都市からの来住が続いている。仁川団地では神戸16.7%，西宮13.1%，大阪11.2%の順となっている。逆瀬川団地では大阪が第一位，仁川団地では神戸が第一位となっている。

またこれまで鉄筋アパートに住んだ経験があるかを問うた結果はつぎの第8表の通りである。

第8表　過去の経験

(3)	1	2	DK	計
逆瀬川	162(64)	87(35)	3(1)	252(100)
仁　川	246(67)	116(32)	4(1)	366(100)

1は経験がない，2はあるを意味している。だから未経験が経験の倍近く多いことが印象的である。

なお入居理由については，クジで当ったとか，結婚したからだとか，転勤しただとか，通勤事情・環境を考慮したなどで入居したという記入が多かった。

II

II—i　団地社会はある程度閉された社会である。そこに住む人びとは入居資格制限などもあって，ホワイト・カラーに属する人びとが殆んどで極めて同質的である。こうした人びとが，同じような白い鉄筋の壁の部室に住んでいる。それらが集って形成する社会は周囲の地域社会とは異なった独特な社会を形成しているのは当然であろう。この点を明らかにするためには，ここに住んでいる人びとが団地内部と外部においてどんな社会関係を結んでいるかを見極めることが必要であろう。

II—ii　まず外部との交渉であるが，それをイ．奥様は年に何回ぐらい実家にゆくか，ロ．阪神間に親しい親類や友人が何軒ぐらいあるかなどを探ぐろうとした。

イ．年に何回ぐらい実家にゆくかの答はつぎの第9表に見られる通りである。

第9表　実　家　へ　の　回　数

(4)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13～20	20以上	DK	計
逆瀬川	31 (12)	66 (26)	36 (15)	10 (4)	8 (3)	10 (4)	4 (2)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	18 (7)	0 (0)	13 (5)	20 (8)	16 (6)	19 (8)	252 (100)
仁　川	32 (9)	89 (24)	39 (11)	27 (7)	8 (2)	18 (5)	13 (3)	0 (0)	3 (1)	2 (1)	26 (7)	0 (0)	19 (5)	64 (18)		26 (7)	366 (100)

団地の多くの主婦は，夫や子供と異って白い壁に閉されている時間が多い。いきおい実家などにゆくことが予想されるところから，こうした質問をしたのである。第9表によると，逆瀬川団地の場合は，月1回が最も多く26%，2回が15%，全然ゆかないが12%，それに13～20回が8%，20回以上が8%となっている。また仁川団地では1回が24%，2回が11%，3回が9%となっており，13～20回以上が18%となっている。0回が9%ある。0回や1，2回が多く，また13回以上も多いということは恐らく，実家と距離や年令の差などによっても左右されるであろう。それらについてはクロス集計を行なったが，ここでは紙面の制限のため省略する。

ロ．団地居住者の団地外における社会関係は実家のほかに，近くの阪神間の新しい親類や友人との関係である。そこで「阪神間に親しい親類や友人がどれだけあるか」について問うてみた。その集計はつぎの第10表である。

第10表　阪神間の親類や友人

(5)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	10以上	DK	計
逆　(親類)	11 (4.4)	30 (11.9)	40 (15.8)	44 (17.4)	18 (7.1)	35 (13.9)	13 (5.2)	9 (3.6)	6 (2.4)	0 (0)	13 (5.2)	7 (2.8)	26 (10.3)	252 (100)
仁　(親類)	29 (7.9)	53 (14.5)	57 (15.6)	51 (13.9)	36 (9.8)	40 (10.9)	11 (3.0)	10 (2.8)	6 (1.6)	2 (0.6)	23 (6.3)	12 (3.3)	36 (9.8)	366 (100)
逆　(友人)	5 (2.0)	29 (11.5)	49 (19.4)	30 (11.9)	20 (8.0)	31 (12.3)	9 (3.6)	5 (2.0)	2 (0.7)	0 (0)	24 (9.5)	17 (6.8)	31 (12.3)	252 (100)
仁　(友人)	23 (6.3)	29 (7.9)	53 (14.5)	56 (15.3)	18 (4.9)	48 (13.1)	15 (4.1)	5 (1.4)	7 (1.9)	0 (0)	29 (7.9)	29 (7.9)	54 (14.8)	366 (100)

親類については，二つの団地の居住者を通じて1～5人までが多い。また友人についても同じことがいえる。ただ気になることは，親類も友人もないのが二つの団地の居住者を通じて若干あることである。とくに逆瀬川団地では少ないことが気にかかる。このことはさきの実家との交渉が逆瀬川団地で少ないのと対応している。彼らはそれを何によって補償しているのであろうか。この点はさらに追究する必要がある。

II—iii　つぎに団地内での社会関係を見てみよう。イ．近所づきあいについてどう思うか，ロ．同棟で親しく交際している者がいるかどうか，ハ．他の棟で親しく交際している者がいるかどうか，ニ．そうした人びととどんなきっかけで親しくなったか，ホ．近所づきあいで注意すべき点は何であるか，などについて問うてみた。

イ．近所づきあいについてどう思うかの集計は第11表に見られる通りである。

第11表　近所づきあいをどう思うか

(6)	1	2	DK	計
逆瀬川	202(80)	23(9)	27(11)	252(100)
仁　川	289(79)	26(7)	51(14)	366(100)

「よいと思う」(1)が圧倒的に多いことは当然である。しかし「悪いと思う」(2)が7～9%あることは気にかかる。こうした人たちはどんな人であるかはこの調査ではうかがい知れないが，どうしてこのような人びとが存在するか，その背景について検討することが必要であろう。

ロ．団地内での交際は同じ棟のほかに他の棟の人たちとの交際がある。そこでまず同じ棟で親しく交際している人があるかどうかを問うてみた。第12表がその集計である。

第12表　同じ棟での交際

(7)	1	2	DK	計
逆瀬川	90(35.6)	152(60.2)	10(4.0)	252(100)
仁　川	165(45.0)	180(49.2)	21(5.8)	366(100)

同じ棟では廊下や階段で顔を合わすことが多い。だから自然に顔見知りになり，親しくなるのが当然だと思われる。しかし宝塚市の住宅公団の現実は必ずしもそうではない。というのは，「ある」(2)が逆瀬川団地では 60.2%，仁川団地では49.2%しかなく「ない」(1)が逆瀬川団地では35.6%，仁川団地では45.0%と予想外に多いからである。この事実はどう理解してよいであろうか。いわゆる団地族の特性に帰すべきものであろうか。しかし棟の構築様式が，廊下式であるか，たて割り的な階段様式であるかによって，かなり左右されるものと思われるが，その点の比較研究はここでは不問に付している。なお念のため「ある」と答えた人が何人ぐらいの人たちと交際しているかをクロスしたのが，つぎの第13表である。

第13表　同棟で「ある」と答えた人の友人数
(7)②

友人数	1人	2人	3人	4人以上	不明	計
逆瀬川	74 (48.6)	35 (23.0)	20 (13.7)	11 (7.3)	12 (7.9)	152
仁　川	98 (54.4)	28 (15.6)	21 (11.7)	11 (6.1)	22 (12.2)	180

ハ. つぎに団地内の他の棟で親しく交際している人びとについて問うてみた。その集計は第14表に示す通りである。

第14表　他棟での交際

(8)	1	2	DK	計
逆瀬川	138(55.6)	100(39.7)	14(4.7)	252(100)
仁　川	171(46.7)	162(44.3)	33(9.0)	366(100)

「ない」(1)が二つの公団を通じて，「ある」(2)よりも若干上回っている。「ない」が逆瀬川団地では55.6%，仁川団地では46.7%，「ある」がそれぞれ39.7%，44.3%となっている。どうして逆瀬川団地が仁川団地よりも「ない」が多いかはさらに究明する必要があろう。考えられることは二つの団地の入居時期の差であるが，果してそれのみが原因であろうか。なお念のため，「ある」と答えた人たちが何人ぐらいの友人があるかをクロスしたのが，つぎの第15表である。

第15表　他棟での友人数

	1人	2人	3人	4人	不明	計
逆瀬川	53 (53.0)	18 (18.0)	12 (12.0)	7 (7.0)	10 (10.0)	100
仁　川	86 (53.0)	27 (16.7)	11 (6.8)	21 (13.0)	17 (10.5)	162

（なお同棟，別棟での「ある」「ない」について入居年度とクロスする必要があるが，これも紙面の都合で省略した。）

ニ. 同じ棟では日常顔を合わす機会が多く，そこから自ら交際のきっかけが生まれるが，棟を異にしている場合はそうはいかない。そこで，どんなきっかけで交際するようになったかをつぎのような形で問うてみた。

その方とは，どの様なことが，きっかけで親しくなられたのですか

1. 子守のついでに
2. 幼稚園や学校のことで
3. 夫同志の職場が同じだから
4. 近くで接触が多いから
5. 趣味や考え方が共通しているから
6. 出身校が同じだから
7. 同郷だから
8. 買物がいっしょだから
9. その他（　　）

その集計はつぎの第16表の通りである。

第16表　交際のきっかけ

(9)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	DK	計
逆瀬川	37(10)	61(16)	4(1)	95(26)	49(13)	7(2)	12(3)	7(2)	14(4)	84(23)	370(100)
仁　川	41(7)	112(19)	13(2)	111(19)	78(13)	8(1)	6(1)	14(2)	32(5)	18(31)	598(100)

逆瀬川団地では第1位は「近くで接触が多いから」(4)の26%，続いて「幼稚園や学校のことで」(2)が16%「趣味や考え方が共通しているから」(5)が13%，「子守について」(1)が10%の順となっている。仁川団地では「幼稚園や学校のことで」(2)と「近くで接触(4)が多いから」とがそれぞれ19%で，以下「趣味や考え方が共通しているから」(5)「子守りについて」(1)の順となっている。二つの住宅公団に共通して見られることは，「近くで接触が多い」と「幼稚園や学校のことで」が交際のきっかけとなっていることである。接触が多いことは交際のきっかけをつくることになるのは自然である。これは団地社会ではなく一般の社会でもそうである。ここで注目すべきは「幼稚園や学校のことで」という子供を通しての交際である。子供が親たち，とくに母親たちの交際のきっかけになることは，ほかの団地調査でもうかがえるが，宝塚市の場合でもその例外ではない。子供の母親たちの交際に演ずる役割りは意外に大きいことは注目に価する。

ところで「夫同志の職場が同じだから」(3)「出身校が同じだから」(6)，「同郷だから」(7)，「買物が一緒だから」(8)などによる交際のきっかけが予想外に低い。これは団地社会の特質であろうか。ほかの都市の団地社会の調査結果と比較検討したいものである。

ホ. 団地社会の人びとは「マイホーム主義者」であり，個人主義者であるといわれている。だから近所づきあいでもいろいろな点で気をくばる必要がある。そこでつぎのような問い方をした。

近所同志の交際の上で最も気を付けるべき点を1つだけお選び下さい。

1. 他人の私生活に立入らぬこと
2. 共同生活を理解し互いに協力すること
3. 他人の噂やかげ口を言わないこと
4. 他人に迷惑をかけないこと
5. 見栄をはらないこと
6. 皆で決めたことは，よく守ること
7. その他（　　）

その集計はつぎの第17表に見られる通りである。

第17表　交際上の注意すべき点

(10)	1	2	3	4	5	6	7	DK	計
逆瀬川	60(24)	46(18)	49(19)	58(23)	6(2)	1(1)	1(1)	31(12)	252(100)
仁　川	103(28)	69(19)	72(20)	69(19)	16(4)	4(1)	1(0)	32 (9)	366(100)

両公団を通じて「他人の私生活に立入らぬこと」(1)が第1位（逆瀬川団地24%，仁川団地28%），「他人に迷惑をかけないこと」(4)，「他人の噂やかげ口を言わないこと」(3)などが高い%を占めている。これは団地社会の性格上当然なことといえるが，「共同生活を理解し互いに協力すること」(2)が18～19%を占めていることは，たとえ「マイホーム主義」や個人主義に徹しているとはいえ，共同生活の必要性をかなり意識していることの反映ではなかろうか。個人は社会をはなれては生きていけない。個人主義と共同生活の必要性とは一見矛盾しているように見えるが，個人主義は共同生活を前提にしてはじめて存在するのである。個人主義的エコイズムは別として，個人主義が十分に発揮されるのは共同生活の場においてである。その意味において個人主義と共同生活とは矛盾しない。この点はこんごの新しい団地社会の形成にひとつの明るい材料を提供しているものといえよう。

Ⅲ

III—i　人間は単に個人と個人との関係を結ぶばかりではなく，集団やグループを形成するものである。団地生活を営む人びともいろいろなグループや団体に所属するものである。そこでこの点をつぎのような問いをしてみた。

あなたは所属しているグループや団体がありますか。

1. ない
2. ある
   ㋑ 団地内のみのグループ
   ㋺ 団地内外に渡るグループ

㈥　団地外のグループ

その集計はつぎの第18表に見られる通りである。

第18表　所属するグループや団体の有無

(11)	1	2	㈠	㈡	㈥	DK	計
逆瀬川	171 (67.8)	57 (22.7)	8 (14.0)	17 (29.8)	34 (59.5)	24 (9.5)	252 (100)
仁　川	220 (60.1)	106 (29.0)	40 (37.4)	45 (42.0)	38 (35.5)	40 (10.9)	366 (100)

②の内分け　答は2つ以上を含む
※　8/57　　14/57　　24/57

「ない」(1) が意外に多いのに気づく。逆瀬川団地では67.8%，仁川団地では60.1%と過半数をはるかに越えている。これはどうしたことであろうか。団地族はマイホームに埋没し，個人主義者であるからとだけで片づけてよいものであろうか。

グループや団体は団地内のものと団地内外にわたるものと団地外のものとの三つに分けることができる。そこで「ある」と答えたもの（逆瀬川団地22.7%，仁川団地29.0%）のうちわけを，この三部門にわけて問うてみた。同じ人がいろいろなグループや団体に所属するものであるから，%はその現われとして受けとって頂きたい。

団地内のみのグループ	逆瀬川団地	14.0%
	仁川団地	37.4%
団地内外にわたるグループ	逆瀬川団地	29.8%
	仁川団地	45.0%
団地外のグループ	逆瀬川団地	59.5%
	仁川団地	35.5%

二つの団地を比較して感ずることは，逆瀬川団地では団地内のみのグループや団地内外にわたるグループに所属する者が少ないが，団地外のグループに属する者が60%近くあるということである。二つの団地の特色をきわだたしているひとつの現われとして受けとれないだろうか。

III—ii　多くの地域社会（狭義）は自治会のような組織が存在しているが，二つの団地社会にはまだこうした自治会組織は存在していない。そこで自治会組織が必要かどうかを問うてみた。その集計は第19表の通りである。

第19表　自治会の必要の有無

(12)	1	2	DK	計
逆瀬川	102(43.4)	121(40.0)	29(19.6)	252(100)
仁　川	52(14.2)	259(70.8)	55(15.0)	366(100)

逆瀬川団地では「思わない」(1)と「思う」(2)がそう差はないが，仁川団地では「思わない」がわずか14.2%であるのに対して，「思う」が70.8%と圧倒的に多い。仁川団地は入居後かなり年月が経っており，また団地が一丸となってこれまでいろいろなことで行動した経験があるところから，自治会的組織の必要を感ずる人びとが多いのであろう。現に「住民会」という組織がある。新しい型の自治会はこうした地盤の上にはじめて形成されるものと期待される。

なお「思う」，「思わない」の理由を集計したのが，つぎの第20表である。

第20表　理　　由

思う②	共同精神を養う	団結による問題解決	(防犯等)住みよくするため	過去の実績から	不自由を感じるから	外部との接触	理由なし
逆瀬川（計 121）	7 (5.8)	33 (27.3)	35 (29.0)		8 (66.6)		52 (43.0)
仁　川（計 259）		73 (28.2)	58 (22.4)	8 (3.1)		10 (3.9)	120 (46.3)
思わない①	**必要を感じない**	**わずらわしい**	**干渉が入る**	**人間関係が難しい**	**現実に自治会は何もしてな**	**役員だけのものになる**	**理由なし**
逆瀬川（計 102）	28 (27.4)	7 (6.9)	3 (3.0)	7 (6.9)	3 (3.0)	3 (3.0)	51 (50.0)
仁　川（計 52）		14 (26.9)	3 (5.8)		7 (13.5)	1 (1.9)	27 (51.9)

III—iii　さきにも述べたように，二つの団地には自治会組織がないが，もし何らかの共通問題が起った場合どうするかがこれらの団地住民にとって考えねばならないことである。そこでつぎのような問い方をしてみた。

例えば，水の問題や防犯，電話等の共通問題が起った場合はどうなさいますか

1.　共同で何か対策をたてる

2.　個人個人で考えて対策をたてる
3.　その他（　　）

その集計は第21表の通りである。

第21表　共通問題の処理

(13)	1	2	3	DK	計
逆瀬川	149(59)	39(16)	23(9)	41(16)	252(100)
仁　川	273(75)	16(4)	19(5)	58(16)	366(100)

「個人で対策をたてる」(2) がわずか（逆瀬川団地16%，仁川団地4%）しかないのに対して，「共同で対策をたてる」(1) が逆瀬川団地59%，仁川団地75%と圧倒的に多い。ここにも二つの団地の差が見られる。ところで共通問題が起ったそのときどきに応じて共同して対策をたてることの積重ねが自ら恒久的な団体（たとえば自治会組織）の形成に向うであろう。

III—iv　団地社会はほかの地域社会とは異なったものを多分に持っている。そこからともすれば団地社会に住む人びとは一種のエリート意識を持ちがちである。そして彼らは彼らの団地生活を保持するために，団地だけでまとまる傾向をとる可能性もある。こうした意識を宝塚の団地の住民たちは持っているかどうかを確めるためにつぎのような問い方をした。

団地生活をより良くするために，団地だけでまとまる傾向をどう思いますか

1.　団地だけでまとまる傾向はよいと思う
2.　別に団地だけでまとまらなくてもよいと思う

その集計はつぎの第22表の通りである。

第22表

(14)	1	2	DK	計
逆瀬川	68(27)	143(57)	41(16)	252(100)
仁　川	155(42)	158(43)	53(15)	366(100)

逆瀬川団地と仁川団地ではかなり開きがあることは興味深い。前者では「団地だけでまとまる」ことを「よい」とした者は27%しかないのに，仁川団地では42%もあること，また「別にまとまらなくてもよい」とした者は，前者では57%と過半数を越えているのに，仁川団地では43%と過半数をかなり下回っている。二つの団地で「必要がない」が共通して「よい」を上回っていることにまず注目しておこう。さらに仁川団地では「まとまる」ことが「よい」とした者とその必要はないとした者との差がそう認められないのに，逆瀬川団地では「まとまる」ことが「よい」がわずかに27%であるのに，その必要がないとした者が57%ある。どうしてこの二つの団地にこのような開きが起っているのであろうか。これはその入居時期が一方が古く，他は新しいということだけに由来しているのであろうか。

III—v　この問題と関連して，団地と団地外の住民の間に何らかのトラブルがこれまで起ったかどうか問うてみた。これは団地エゴイズムあるいは団地モンロー主義ともいえる問題と関連している。数年前に千里ニュータウンでゴミ焼却場の設置について当時の新聞紙上を賑わしたことがある。これは千里ニュータウン住民のエゴイズムといえる。

つぎのような問い方をした。

15. 団地外の住民と，トラブルが起きたことがありますか

例えば，千里ニュータウンにおけるゴミの焼却の問題等

1.　ない
2.　ある（　　）

その集計はつぎの第23表の通りである。

第23表　団地外とのトラブルの問題

(15)	1	2	DK	計
逆瀬川	225(89)	2(1)	25(10)	252(100)
仁　川	304(83)	4(1)	58(16)	366(100)

二つの団地ではそのようなトラブルは殆んどなかったという答が得られた。この点から見ると，これらの団地にはいわゆる団地エゴイズムは見られない。しかしこれは団地社会をひとつのまとまった社会として認めていないことに拠るとも解釈できるし，またこれらの団地の住民は自分たちだけが特別な集団を形成していると考えていないとも解釈できる。

Ⅳ

Ⅳ—i　住宅公団の団地では規模の大小によってさまざまな施設がある。たとえば，千里ニュータウンのような大規模のものになると学校，幼稚園，診療所，郵便局その他の施設が完備している。しかし最小規模の団地でもコンミュニティーとして存続させるためには少なくとも集会所のような施設だけは必要である。（集会所の設置については，公営住宅建設基準第22条によって規定されている。）

団地としては最小規模に属する宝塚の二つの団地でも集会所だけはある。（なお逆瀬川団地には「オアシス」というショッピング・センターがある。）そこで団地の人びとがこの集会所をどのように利用しているかをめぐって，若干の質問をしてみた。

Ⅳ—ii　まず利用しないか(1)，利用しているか(2)を問うてみた。

その集計はつぎの第24表に示す通りである。

第24表　集会所の利用

(16)	1	2	DK	計
逆瀬川	173(69)	66(26)	13(5)	252(100)
仁　川	252(69)	88(24)	26(7)	366(100)

これによってみると，二つの公団とも「利用しない」が69%と圧倒的に多い。「利用している」がわずかに24～26%しかない。切角の施設である集会所を利用しないのはどうした理由からであろうか。マイホーム主義，個人主義だというだけで片付けられるであろうか。この点はさらに追及する必要があろう。

集会所を利用する人としない人がどんな人びとであるかを少しでも明らかにするために若干のクロス集計を試みた。

第25表　集会所を利用している人×
団地に入居した年度　　16②×②㋑

入居年度	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	DK
逆瀬川							6	39	6	5	6	4	1
仁　川	34	8	4	4	1	4	5	6	8	3	9	4	0

イ．まず利用している人と団地入居年度とをクロスしてみた。つぎの第25表がそれである。

仁川団地では初年度入居の人が圧倒的に多い。また逆瀬川団地でも，初年度，とくにその次の年の入居者が圧倒的である。これは最初に入居した人びとの間に新しい団地社会をつくり上げようとする意気込みがあったのではなかろうか。

なお利用している人，しない人の学歴，家族数などとのクロス集計も行なったが紙面の関係で省略した。

ロ．利用しない人が余暇をどのように過しているかをクロスしたのが，第26表である。

第26表　利用しない人と余暇の過し方

	1	2	3	4	DK
逆瀬川	116	2	8	31	15
仁　川	148	6	20	39	37

4の内分け　子守り，勤務，読書，稽古事など。

Ⅳ—iii　つぎに集会所をどう利用しているかについて，つぎのように問うてみた。

主にどの様なことで集会所を利用されますか

1. 子供の稽古事
2. 主婦の趣味やレクリエーション活動
3. 自治会活動
4. 老人会
5. 物品販売
6. その他（　　）

その集計はつぎの第27表に見られる通りである。

第27表　集会所利用の理由

(17)	1	2	3	4	5	6	DK	計
逆瀬川	55 (20)	21 (8)	0 (0)	0 (0)	17 (6)	10 (4)	170 (26)	273 (100)
仁　川	33 (8)	37 (9)	15 (4)	5 (1)	45 (11)	15 (4)	253 (63)	403 (100)

逆瀬川団地では「子供の稽古事」20%，「主婦の趣味やレクリエーション活動」8%，「物品販売」6%，その他4%の順となっており，仁川団地では「物品販売」11%，「主婦の趣味やレクリエーション活動」9%，「子供の稽古事」8%，「自治会活動」4%，その他4%，「老人会」1%となっている。（注．正式の自治会はまだない

が，住民会という自治会めいたものがある。恐らくこのことを指しているのであろう。)

集会所利用理由で，二つの公団の間に差が見られる。物品販売については仁川団地は活発に行なっていることが，11%となって現われている。また自治会活動（といっても，正式の自治会ではない）のための利用が仁川団地では4%あるのに，逆瀬川団地では0%である。また「子供の稽古事」の利用では逆瀬川団地では20%と多いのに，仁川団地ではわずかに8%しかない。こうしたいろいろな利用度の開きはこの二つの公団の性格をある程度浮ぼりにしているといえよう。

IV—iv　つぎに何人ぐらいで集会所を利用するかについてつぎのように問うてみた。

集会所を利用される場合，何人位で集まって利用されますか

1. 10人未満
2. 20人未満
3. 20人以上

その集計はつぎの第28表で見られる通りである。

第28表　何人位で集会所を利用するか

(18)	1	2	3	DK	計
逆瀬川	15(6)	13(5)	26(10)	198(79)	252(100)
仁　川	24(6)	29(8)	35(10)	278(76)	366(100)

二つの公団を通じて，20人以上が10%，20人未満が5～8%，10人未満が6%となっている。団地では私宅は狭いので，二，三人ぐらいの集りは私宅でも行なうこともできるが，それ以上の人数になると物理的にも無理なのである。20人以上の頻度がそのことを如実に示している。

IV—v　人間の交際はいろいろな契機で行なわれる。集会所で顔を合わすことが，その後の交際にどう響いているか，この点を問うてみた。

集会所で集まった方々とは，集会時間以外にも交際なさいますか

1. つき合わない
2. 時々つき合う
3. よくつき合う

その結果はつぎの第29表で見られる通りである。

第29表　集会所後での交際

(19)	1	2	3	DK	計
逆瀬川	16(6.3)	31(12.3)	7(2.8)	198 (78.6)	252(100)
仁　川	29(7.9)	54(14.8)	13(3.6)	270 (73.7)	366(100)

「時々つき合う」(2) が最も多く，「つき合わない」(1)がそれに続き，「よくつき合う」(3)が最も低い。集会所での集まりが，それ以外の交際にそう大きく影響していないようである。集会所の会合はもともと目的的・機能的な集合であるためであろうか。なお集会所に集まる人数とその後の交際についてクロス集計を用意したが，省略する。

IV—vi　さきにも見たように，宝塚の団地では集会所を利用する者は少ない。そこでその理由についてつぎのように問うてみた。

集会所を利用しない方は，なぜですか

1. 興味・関心がないから
2. 家事・仕事で忙しいから
3. 行きたいが，なじめないから
4. 面倒だから
5. その他（　　）

その集計はつぎの第30表に示す通りである。

第30表　集会所を利用しない理由

(20)	1	2	3	4	5	DK	計
逆瀬川	44 (16.2)	64 (25.4)	16 (5.0)	10 (3.7)	52 (19.4)	85 (31.7)	271 (100)
仁　川	47 (12.8)	99 (27.0)	17 (4.7)	16 (4.4)	146 (39.9)	41 (11.2)	366 (100)

この二つの公団を通じて，「その他」の理由は別にすると，「家事・仕事で忙しいから」の理由が第1位，「興味・関心がないから」が第2位，「行きたいが，なじめないから」が第3位，「面倒だから」が第4位の順となっている。団地に住む人たちの心理の一面がうかがえる。

IV—vii　ところで集会所の施設は既に存在しているし，またそれを利用している人びともいる。そこで主として利用していない人びとを念頭において，将来，1. 集会所を利用する考えがあるか，2. またどのような集会活動を望んでいるかについて問うてみた。その集計はつぎの第31表に見られる通りである。

第31表　将来，集会所の利用，集会活動の希望

(21)	1	2	DK	計
逆瀬川	75(29)	96(40)	81(30)	252(100)
仁　川	126(34)	117(32)	123(34)	366(100)

逆瀬川団地では利用する希望のある者が，ない者よりも上回っていることは注目してよいであろう。彼らが何のために利用したいかの内分けを多いものの順にみてみると，稽古事，趣味，講習会自治活動，勉強会，スポーツとなっている。

V

V—i　現代は余暇時代だといわれている。とくにすべてが合理化されている団地の主婦にとっては余暇時間が多い。そこでこの余暇時間をどのように使っているかを若干の角度から問うてみた。

V—ii　まず余暇時間を何に利用するかについて，つぎのように問うてみた。

奥様は，主にどの様に余暇を利用なさっていますか

1.　趣味やレクリエーションに
2.　パートに出かける
3.　内職をする
4.　その他（　　）

その集計はつぎの第32表の通りである。

第32表　余暇の利用

(22)	1	2	3	4	DK	計
逆瀬川	167 (64.5)	6(2.3)	13 (4.9)	42 (15.2)	31 (11.1)	259(100)
仁　川	209 (57.1)	9(2.5)	27 (7.4)	54 (14.7)	67 (8.3)	366(100)

二つの団地を通じて，「趣味やレクリエーション」(1)というのが圧倒的に多い（64.5%，57.1%）「その他」の15%前後を別にすると「パート」(2)をする者が2.3—2.5%，また「内職をする」(3)者が逆瀬川団地では4.9%，仁川団地では7.4%となっている。

それにしてもパートや共稼ぎが案外少ない。しばしば団地には共稼ぎやパートの人たちが多いようにいわれているが，宝塚の団地の場合は例外なのであろうか。

V—iii　つぎにマス・コミに余暇を使うことが考えられるので，まず新聞について問うた。

イ．新聞を購読しているかどうかを問うてみた。その集計はつぎの第33表の通りである。

第33表　新聞の購読

(23)	1	2	DK	計
逆瀬川	1(0　)	239(96)	12(4)	252(100)
仁　川	2(0.6)	341(93.1)	23(6.3)	366(100)

〔(1)しない，(2)している。〕

こんにち新聞を購読しない家庭は殆んどない。まして団地の家庭においてはそうである。だからこれは愚問であったかも知れない。

ロ．新聞の購読は家庭単位で行なわれるものである。そこで主婦がそれを読んでいるかを問うてみた。その集計はつぎの第34表の通りである。

第34表　新聞を読むかどうか

(24)	1	2	DK	計
逆瀬川	14(6.0)	225(88.1)	13(5.9)	252(100)
仁　川	16(4.4)	323(88.2)	27(7.4)	366(100)

〔(1)　読まない，(2)　読む〕

読んでいる(2)が88%強，そして読まない(1)が4.4—6%が極めて少ない。家庭で購読していても，読まない者がいることがうかがわれる（第33表参照）。恐らく文字よりもすぐ耳や目に入るラジオ，テレビ党が多いのかもしれない。

ハ．つぎに一日に何時間ほど新聞を読むかをつぎのように問うか。

平均，一日に何時間程，新聞を読まれますか

1.　全然読まない
2.　15分以内
3.　30分以内
4.　1時間以内
5.　1時間以上

その集計は第35表に示す通りである。

30分以内が逆43.6%，仁38%で第1位，1時間以内が逆28.9%，仁29.2%で第2位，かなり下って15分以内が逆15.1%，仁17.2%で第3位，さす

第35表　新聞を読む時間

(25)	1	2	3	4	5	DK	計
逆瀬川	1(0.5)	38 (15.1)	110 (43.6)	73 (28.9)	18 (7.1)	12 (4.8)	252 (100)
仁　川	1(0.3)	63 (17.2)	139 (38.0)	108 (29.2)	31 (8.5)	25 (6.8)	366 (100)

がに1時間以上は逆7.1%，仁8.5%と低くなっている。これによってみると，多くの人びとは30分～1時間以内ということになろう。

ニ. 新聞を読む時間と関連して，読書の時間をつぎのように問うてみた。

あなたは一日平均，何時間程読書をなさいますか

1.　読まない
2.　15分以内
3.　30分以内
4.　1時間以内
5.　1時間以上

その集計は第36表の通りである。

第36表　読書に費す時間

(26)	2	2	3	4	5	DK	計
逆瀬川	37 (14.7)	39 (15.5)	67 (26.6)	71 (28.1)	27 (10.7)	11 (4.4)	252 (100)
仁　川	61 (16.7)	56 (15.3)	109 (28.6)	80 (21.8)	44 (13.2)	16 (4.4)	366 (100)

これによってみると，30分以内～1時間以内が圧倒的に多く，つづいて15分以内，1時間以内となっている。大体新聞を読む時間と対応している。

ホ. テレビは殆んどの家庭にあるものと仮定して，何時間ぐらいテレビを見るかを問うてみた。

あなたは一日平均，何時間程テレビを見ますか

1.　見ない
2.　30分以内
3.　1時間以内
4.　2時間以内
5.　2時間以上

その集計はつぎの第37表の通りである。

さすがにテレビに費す時間は新聞や読書に費す時間よりも多い。1時間～1時間以上が70%以上である。そして30分以内が15.6～19.9%，30分以内が3.8～7.5%となっている。テレビの影響力恐

第37表　テレビに費す時間

(27)	1	2	3	4	5	DK	計
逆瀬川	0　(0)	19 (7.5)	39 (15.6)	95 (37.7)	97 (38.4)	2(0.8)	252 (100)
仁　川	7(1.9)	14 (3.8)	73 (19.9)	134 (36.7)	130 (35.5)	8(2.2)	366 (100)

るべしといえる。

Ⅵ

VI—i　さきに団地内のことについて主として個人（主婦）の立場から問うてみたが，次元を団地社会全体に移して，いろいろな面から問うた。

VI—ii　まず団地生活をこんごも続けるかどうかの問いから始めた。これは団地生活の満足度・不満足度をうかがえるからである。

その集計はつぎの第38表の通りである。

第38表　永住の意志の有無

(29)	1	2	DK	計
逆瀬川	88(35.9)	148(57.7)	16(6.4)	252(100)
仁　川	170(46.4)	182(49.8)	14(3.8)	366(100)

〔(1)　意志なし，(2)意志あり〕

逆瀬川団地では「その意志がない」(1)が35.9%「意志ある」(2) が57.7%，仁川団地では「意志ない」が46.4%，「意志ある」が49.8%となっている。「意志がある」が多いとはいえ，「意志がない」もかなり多いこと，また両者の開きは仁川団地ではそう大きくないのに，逆瀬川団地ではかなりある。この開きの差は仁川団地の建設からはかなり年月が経っているところから，団地生活に慣れ，倦きがきているのと比較して，逆瀬川団地はまだ新しく漸くにして入居したという気持などがこの二つの団地の差が生んだのではなかろうか。

それにしても二つの団地を通じて，「意志なし」がかなり多いことに注意しなければならない。団地の入居は単なる寄り木的なもの，一時の仮の宿と考えている者がかなり多いことを意味してはいないか。もちろん団地の画一的な，あまり広くない住宅構造については問題があろうが，しかしあわよくば折を見て抜け出そうとしている者が多

いことは，団地社会の形成にとって一つの重大な問題を投げかけているといえよう。

なお団地生活を続ける意志のある者とない者の背景や行動などの一端をうかがうために，イ．彼らの入居年度，ロ．年令別，ハ．自治会の必要度ニ．投票率，ホ．共同施設の要望などの各項目とをクロスさせて見た。つぎの第39表がその集計である。読みとって頂きたい 。

第39表　意志の有無とのクロス

＜団地生活を続ける気持のある人＞

イ．これまでに鉄筋アパートに住んだことがあるか，ないか

	ある	ない	DK	計
逆瀬川	51人 (34.5%)	97人 (65.5%)	0 (0%)	148 (100)
仁川	63人 (34.6%)	119人 (65.4%)	0 (0%)	182 (100)

ロ．年令層

	20～25才	25～30	30～35	35～40	40～45	45～50	50以上	DK	計
逆瀬川	7人 (4.8%)	44人 (29.7%)	47人 (31.7%)	23人 (15.5%)	13人 (8.8%)	5人 (3.4%)	6人 (4.1%)	3人 (2.0%)	148人 (100%)
仁川	8人 (4.4%)	46人 (25.3%)	40人 (22.0%)	30人 (16.5%)	28人 (15.3%)	11人 (6.0%)	18人 (9.9%)	1人 (0.6%)	182人 (100%)

ハ．自治会組織を必要と思うか，思わないか

	思う	思わない	DK	計
逆瀬川	74人 (50.0%)	56人 (37.8%)	18人 (12.2%)	148人 (100%)
仁川	140人 (76.9%)	26人 (14.3%)	16人 (8.8%)	182人 (100%)

ニ．投票の状況

	衆議院，市長，市会議員とも	市会又は市長のどちらかに投票	衆議員のみに投票	DK	計
逆瀬川	60人 (40.5%)	22人 (14.9%)	39人 (26.4%)	27人 (18.2%)	148
仁川	85人 (46.7%)	31人 (17.0%)	47人 (25.8%)	19人 (10.5%)	182

ホ．どのような共同施設を必要と思うか

	保育所(幼稚園)	グランドスポーツセンター	学習塾	病院	三輪車・自転車などの置場	クラブ	マーケット	図書館	駐車場	郵便局	カガッ子預る所	その他	DK	計
逆瀬川	41人	13人	6人	8人	4人	0人	1人	0人	2人	3人	0人	2人		148
仁川	24人	11人	6人	1人	1人	2人	3人	2人	1人	0人	3人	2人		182

＜団地生活を続ける気持のない人＞

イ．これまでに鉄筋アパートに住んだことがあるかないか

	ある	ない	DK	計
逆瀬川	25人 (28.3%)	63 (71.7%)	0 (0%)	88 (100%)
仁川	43人 (25.3%)	122 (71.7%)	5 (3.0%)	170 (100%)

ロ．年 令 層

	20 ～ 25	25 ～ 30	30 ～ 35	35 ～ 40	40 ～ 45	45 ～ 50	50 以 上	DK	計
逆 瀬 川	5(5.7%)	36(41.0%)	25(28.5%)	9(10.2%)	7(7.9%)	2(2.2%)	1(1.1%)	3(3.4%)	88
仁 川	8(4.7%)	46(27.1%)	47(27.6%)	33(19.4%)	9(5.3%)	4(2.4%)	8(4.7%)	15(8.8%)	170

ハ．自治会組織を必要と思うか思わないか

	思 う	思わない	DK	計
逆 瀬 川	44人 (50.2)	38人 (43.3%)	6人 (6.5%)	88
仁 川	109人 (64.1%)	25人 (14.7%)	36人 (21.2%)	170

ニ．投票の状況

	衆，市長，市会とも	市長又は市会のどちらかに	衆 の み	DK	計
逆 瀬 川	30人(34.2%)	31人(35.3%)	15人(17.1%)	12人(13.5%)	88
仁 川	57人(33.5%)	46人(27.1%)	29人(17.1%)	38人(22.3%)	170

ホ．どのような共同施設を必要と思うか

	保育所(幼稚園)	グランド，スポーツセンター，体育館	病 院	学 習 塾	自転車置場	ク ラ ブ	来客用の宿泊施設	DK	計
逆 瀬 川	26人	7人	4人	8人	0人	0人	0人		88
仁 川	20人	11人	2人	6人	3人	1人	1人		170

VI—iii　団地生活について不満があるかについて，つぎのように問うてみた。

団地生活について何かご不満はありますか

1. 騒音
2. 路上駐車
3. 子供の遊び場
4. 交通の便
5. その他（　　）

その集計はつぎの第40表の通りである。

第40表　団地生活への不満な点

(28)	1	2	3	4	5	DK	計
逆瀬川	43 (13.2)	44 (13.6)	33 (10.2)	101 (31.0)	58 (17.8)	46 (14.2)	325 (100)
仁 川	84 (18.5)	74 (16.3)	47 (10.3)	74 (16.3)	95 (21.0)	80 (17.6)	454 (100)

「その他」は別にして，逆瀬川団地では「交通の便」が31%と多く第1位,「路上駐車」,「騒音」が13%代で続いており，「子供の遊ぶ場」は10.2%で第4位となっている。仁川団地では，「騒音」が18.5%で第1位，「交通の便」と「路上駐車」がそれぞれ16.3%で第2位，「子供の遊び場」が10.3%で第4位となっている。逆瀬川団地で「交通の便」の不満が第1位であること。また仁川団地で「騒音」が第1位であることは，それぞれの団地の立地条件によるものといえよう。「子供の遊び場」についての不満がいずれの団地でも10%強あることは，たとえ第4位とはいえ，子を持つ母の心を現わしているといえよう。

VI—iv　団地生活についていろいろな不満があるとしても，全般的に団地をより良くするために工夫をする必要がある。そのことで何か気がつくことがあれば自由に答えて欲しいという問い方をしてみた。

その集計はつぎの第41表に示す通りである。

まず気がつくことは，無解答者が逆瀬川団地では252人のうち182人という73.2%にあたる多数であり，解答者は70人，27.8%という少数であるこ

第41表　団地生活を良くするための努力目標

(35)	ans	DK	計	内分け	話合いの場をもつ	規則を守る	協力と理解	共同設備充実	市場を作る	公団の協力	部屋数を多くする	自治会活動	社会共同体の認識	なし
逆瀬川	70 (27.8)	182 (72.2)	252 (100)		6 (8.6)	9 (12.9)	12 (17.2)	5 (7.2)	1 (1.4)	9 (12.9)	0 (0)	14 (19.9)	14 (19.9)	0 (0)
仁川	104 (28.5)	262 (71.5)	366 (100)		8 (7.7)	17 (16.4)	17 (16.4)	26 (25.0)	2 (1.9)	2 (1.9)	10 (9.5)	5 (4.8)	9 (8.7)	8 (7.7)

と。仁川団地でも無解答者は366人のうち262人という 71.5%にあたる多数であるのに，解答者は104人，28.5%という少数であることである。それだけ積極的に団地社会をより良くしようとする人びとが少ないといえよう。

少ない解答者（逆瀬川団地70人，仁川団地 104人）の解答の内分けて見てみると，いずれももっともなこととといえるが，二つの団地でかなり相違が見られる。たとえば，「共同施設充実」は仁川団地では25%であるのに，逆瀬川団地ではわずかに7.2%しかない。また自治会活動や社会共同体認識といったことでは逆瀬川団地では19.9%あるのに，仁川団地ではわずかに4.8%，8.7%しかない。公団の協力を訴える声が逆瀬川団地では12.9%であるのに，仁川団地では 1.9%と極めて少ない。

VI—v　なおこの二つの団地には「パート」や「共稼ぎ」をする者が少ないが，念のためそうした人びとを念頭において，イ．家をあけている間の子供をどうしているか，ロ．団地内で何か共同施設が必要かということを問うてみた。

イ． 働きに出た不在中の子供をどうしているかについての答の集計はつぎの第42表に見られる通りである。

第42表　不在中の子供をどうするか

(33)	保育園	母にまかす	なにもしていない	DK	計
逆瀬川	1(0.4)	3(1.3)	2(0.8)	246 (97.5)	252 (100)
仁川	2(0.5)	0(0)	2(0.5)	362 (99.0)	366 (100)

不解答者が逆瀬川団地で252人中246人，97.5%，仁川団地で366人中362人，99%と圧倒的に多いことは，「パート」や「共稼ぎ」の人びとが少ないことを意味している。

ロ． 団地内で，学習塾や保育園など，その他どのような共同施設が必要かについて問うた答の集計は第43表に示す通りである。

第43表　必要な共同施設

(34)	ans	DK	計
逆瀬川	105(42)	147(58)	252(100)
仁川	100(27)	266(73)	366(100)

内分け	保育所	運動施設広場	医療施設	学習塾	その他
	68(68)	20(20)	13(13)	12(12)	17(17)
	48(48)	25(25)	3(3)	14(14)	10(10)

さきのイでの解答者の数とここでのそれとはかなり差がある。イでは無解答者が逆瀬川団地では252人中 246人，97.5%であったのに，ロでは 252人中 147人，58%となっており，また仁川団地でもイでは無解答者は366人中362人，99%であったのが，ロでは366人中266人，73%となっている。それに伴って解答者はそれだけロの場合は増えていることになる。恐らくこれは単に「パート」や「共稼ぎ」の人たちだけではなく，そうでない人たちも答えたのであろう。保育所の要求が68%，48%と極めて多いことなどを考慮に入れると，もしそうした施設があれば自分も働きに出かけたいと思っている人びともあるといえないであろうか。続いて運動施設や広場の要求が20%，25%あることに注意しておこう。

VI—vi　団地の日常生活は買物の便によって左右されることが多い。そこでイ．買物をどこでするか，ロ．その際不便を感じないかどうかを問うてみた。

イ． 日用品と高級品とに分けて，その買物をどこでするかを問うてみた。

その集計は第44表の通りである。

逆瀬川団地と仁川団地とでは日常品の買物の場所がちがうのは，立地条件の差によるものといえる。（逆瀬川団地には団地内に「オアシス」とい

第44表　どこで買物をするか

(36) 日用品	オアシス	組合マーケット	市場	スーパー	不明	計
逆瀬川	111(44.0)	80(31.7)	108(42.8)	27(10.7)	18(7.1)	/252
	組合マーケット	スーパー	仁川公団市場	近くの商店	不明	
仁川	300(81.9)	22(6.0)	135(36 9)	26(7.1)	37(10.1)	/366

高級品	大阪方面	神戸方面	百貨店	マーケット	専門店	その他	不明	計
逆瀬川	30(11.9)	55(23.0)	133(51.5)	3(1.2)		2(0.8)	51(20.2)	/252
仁川	69(18.8)	73(19.9)	216(59.0)	4(1.1)	40(10.9)		80(21.9)	/366

う日常品売店がある)。

高級品については，百貨店が過半数を占めている。なお神戸方面が大阪方面よりも多いことは注目してよい。

ロ．その際不便を感ずるかどうかについて問うた。第45表がその集計である。

第45表

(37)	1	2	DK	計
逆瀬川	95(37.6)	137(54.5)	20(7.9)	252(100)
仁川	198(54.1)	133(36.3)	35(9.5)	366(100)

〔1．感じない　　2．感じる〕

(1)と(2)とが逆瀬川団地と仁川団地とでは逆になっていることに気がつくであろう。なお不便を感じる理由についての集計はつぎの第46表に見られる通りである。

第46表　不便の理由

(37)	品不足，高値，サービス不足	交通の不便（バスタクシー電車）	駅まで遠い	不明	計
逆瀬川	59(43.0)	66(48.1)	5 (3.7)	14(10.2)	137
仁川	84(58.3)	12 (8.3)	59(41.0)	10 (6.9)	144

ここでもまた不便を感じる理由が両団地で逆になっている。

Ⅶ

VII—i　団地社会はいろいろな角度（次元）からとらえる必要がある。本稿でのこれまでのものは団地社会の内部に焦点を合わして行なってきた。しかし団地社会とそれをとりまく地域社会との関係を眺める必要もある。ところで団地社会とその周辺の地域社会との関係をとりあげる場合，団地社会から周辺の地域社会，さらに市全体の社会をどう眺めているかという角度と周辺の地域社会，市全体の社会から団地社会をどう眺めているかという二つの角度がある。この二つの角度のうち本稿では前者の角度のみをとりあげ，後者のそれは後日に残したことを予めことわっておきたい。

ところで団地社会と他の地域社会，市全体の社会との関係であるが，これにも二つに大別する必要がある。直接団地社会をとりまいている地元の地域社会との関係と都市全体の社会との関係との二つの関係である。前者については，さきに「団地外の住民とトラブルが起ったことがあるか」という簡単な質問で若干見てきた。それによるとそう大したトラブルがないようであった。そこでここでは市全体の社会を団地社会の民住がどう見ているかを探ぐることにしたい。

VII—ii　このことを 1. 市政に関心があるかどうか， 2. 市政に関して何か望まれることがあるか， 3. 選挙の投票についての三つに集約して問うことにした。

イ．まず市政に関心があるかどうかについてであるが，市政の動向や政策などに関心を持つことは市全体に関心を持っているひとつの現われといえる。この問に対する答の集計はつぎの第47表に見られる通りである。

二つの団地を通じて，「関心がない」(1) が33〜

第47表　市政への関心

(30)	1	2	DK	計
逆瀬川	84(33.3)	153(60.7)	15(6.0)	252(100)
仁　川	126(34.4)	217(59.3)	23(6.4)	366(100)

〔(1)　関心がない，(2)関心がある〕

34%で，「関心がある」(2) が60%前後ある。かなり関心度が高いといえる。

ロ．つぎに市政について何を望むかについて問うてみた。その集計はつぎの第48表に見られる通りである。

市政への関心度はかなり高いが，さて何を具体的に望むかということになると，「ない」(1) が逆瀬川団地では12.2%，それにDK31.8%を加えると，無関心派が44%の多きに達し，「ある」(2) の36%をかなり越えている。また仁川団地では「ない」(1) が31.4%，それにDKの29.2%を加えると無関心派は60.6%となり，「ある」(2) の39.4%をはるかに越えている。

第48表　市政何を望むか

(31)	1	2	DK	計
逆瀬川	56(12.2)	116(36.0)	80(31.8)	252(100)
仁　川	115(31.4)	144(39.4)	107(29.2)	366(100)

具体的の要求を集計したのが，第49表である。

第49表

	公立病院設置	上水道の確保	道路拡張	物価安定減税	教育施設の充実	公害対策(騒音緑化)	バスの増発	市民の声を聞いてほしい	公園，図書館の増加設立	文化観光都市として発展させてほし	不明	計
逆瀬川	33(28.5)	30(25.9)	11 (9.5)	15(12.9)	22(19.0)	6 (5.2)	2(1.7)	8(6.9)	6(5.2)	0	11 (9.5)	116
仁　川	22(15.3)	30(25.0)	21(14.6)	15(10.4)	20(13.9)	16(11.1)	3(2.1)	0	0	12(8.3)	15(10.4)	144

逆瀬川団地と仁川団地とでは要望事項の順位が異なっている。団地の立地条件によるものであろう。しかし公立病院設置，上水道の確保，道路，教育施設の充実などが高位を占めていることに注目したい。

ハ．選挙投票を問うことによって，市政への関心度をみてみた。つぎのように問うた。

この前の選挙で投票されましたか。（投票した選挙に○をお入れ下さい）

1.　衆議院選挙
2.　市長選挙
3.　市会議員選挙

その集計はつぎの第50表の通りである。

第50表　選挙の投票

(32)	1	2	3	DK	計
逆瀬川	197 (78.2)	120 (47.6)	112 (44.4)	40 (15.9)	252(100)
仁　川	283 (77.3)	169 (46.1)	195 (53.2)	63 (17.2)	366(100)

ナショナル・レベルの選挙とローカル・レベルの選挙では，団地社会では前者が投票率は高く，後者が低いのは一般的傾向のようである。宝塚の二つの団地でもこの傾向が見られる。逆瀬川団地では衆議院選挙(1)78.2%，市長選挙(2)47.6%，市会議員選挙(3)44.4%となっている。また仁川団地では(1)が77.3%，(2)が46.1%，(3)が53.2%となっている。

ここで気がつくことは，仁川団地では市長選挙の投票率よりも市会議員選挙の投票率が上回っていることである。この現象のひとつの要因として仁川団地から市会議員が立候補していたことが考えられる。

なお団地入居年度と投票率に何らかの関係があるのではないかと考え，それらをクロスしたが，そう大きな開きがないようであるので，クロス表は省略する。

VIII

VIII—i　以上が今回の調査の結果の大略である。定着性がないこと，集会所の利用者が少ないこと，また自治会組織も正式には存在していないことなどは二つの団地に共通しているが，仁川団地では逆瀬川団地に比べて何らかのコンミュニティ・センチメントが芽生えている。これは二つの

団地の年輪の差だけでは片付けられないであろう。（仁川団地には住民会という組織がある。）二つの団地の詳しい比較についてはこれまでの叙述を参照されたい。

VIII—ii　こうした団地調査はほかの都市の類似な団地との比較研究が必要であることはいうまでもない。この問題は他日に期さねばならない。

VIII—iii　団地開発は大都市の住宅政策との関係において行なわれているが，そこにそれを受けいれる地元の社会との関係，さらにまたこれまでのような団地開発で終始してよいかどうか，単に入れ物だけを作ることが果して地元の都市づくりにプラスになるかどうかなどの観点からも，住宅政策を改めて考え直す必要がないであろうか。

VIII—iv　今回の調査ははじめに述べたように限られた角度から行なったこと，またその方法にしてもアンケート方式のみに終っていることなどをここで繰り返してことわっておきたい。極めて不完全な調査であったことはいうまでもない。

（なおこの調査は社会部三年の私のゼミナールの学生，井元作枝さん，乾宏子さん，石突有理子さんに協力して頂いたことを付記しておこう。）

（1970・12・9　紅葉谷にて）